

学 位 論 文 題 名

日本の北辺と北太平洋の歴史的研究

－ 安永・天明年間を中心に－

学位論文内容の要旨

本論文は、1770 年代後半と 1780 年代の日本北方における初発の対外交渉についての詳細な研究である。日露を中心とする対外交渉の実証とともに、ロシア人、欧米人渡来の歴史的背景、渡来の経緯とその原因について、ロシア・欧米側からの検討も併せおこなっている。また、日本北方地域の先住民族であり、交渉を仲立ちした、独自の領域をもつ千島アイヌ民族の個性についても、北太平洋地域諸民族とあわせて実証的な検討をおこなっている。従来の日本史学からの研究が、日本の視点にかたよって北方史を研究していたのにたいして、ロシアおよび欧米からの視点、さらに千島アイヌ民族をはじめ北太平洋地域先住諸民族からの視点を加えて検討を加えている。史料としては、18 世紀後半期の近世後期古文書とともに欧文史料（露・英・独・仏）と欧米先行研究を博搜した研究である。

第 1 章「安永年間の蝦夷地における日露交渉と千島アイヌ」では、安永 7 年のノッカマップ、そして同 8 年の厚岸における日露交渉について検討する。日本側史料とロシア側史料の両者から、詳細に交渉経過を再現している。ロシア側の交渉のねらいが貿易実現に固定されていたのではなく、交渉姿勢において柔軟であったこと、日本側、すなわち松前藩も、ロシア人が直接にエトロフ島アイヌと交易することを認めないが、北千島すなわちロシアの勢力範囲の「クリムシリ」島（北千島のどの島に特定されるかは不明）アイヌを介してならば問題ないという、事実上ある程度の交易を認める柔軟な政策を採っていたことを検証している。

松前藩は、交渉を幕府に内密にもしていた。交渉では、お互いに情報収集に積極的であり、友好的に推移したことも明らかにされている。また、千島アイヌが通訳者・情報提供者として役割を果たしており、日露交渉が千島アイヌの世界に仲介された様相を検討している。南千島において、アイヌと日本との交易のルートにロシアが交易相手として現れ、1760 年代にはロシア人進出がウルップ島におよび、ウルップ島とエトロフ島が、千島アイヌによって交渉が担われつつ、日露交渉の焦点になって行く過程を詳細に実証している。

第 2 章「安永年間のロシア人蝦夷地渡来の歴史的背景」では、18 世紀後期にロシア商人が、先住民族を従属させつつ、カムチャツカ半島から、当時、高価なラッコなど「海獣

の宝庫」であった北太平洋でアメリカ大陸北西部に拡がっていたことを検証する。一方でロシアは、カムチャツカから北千島を経てやがて南千島に南下し、蝦夷地に渡来したが、その原因と経緯について、18世紀後半からの、シベリアと北太平洋における毛皮狩猟と交易、キャフタと中国広東でのロシアの毛皮貿易の展開と関連させて詳しく研究している。

ロシア政府に後援されたロシア商船隊の毛皮狩猟は、千島に南下し、千島アイヌにヤサークという毛皮税をかけ、圧政をおこなっていた。また、欧米から入った疫病で1760年代以降、カムチャツカの先住民人口が激減していた。そのため1771年には、南千島アイヌが一斉に蜂起し、ロシア人たちを殺害するウルップ事件がおきたことを詳しく検証している。

安永年間のロシアの来航は、南千島におけるアイヌと日本人との交渉実態を知ることに目的があったことも検証し、また、ロシア進出が、農業可能な南千島を「獲得」するためだったという従来の見解を批判している。すなわち、領土拡張政策がトルコとの戦争などで撤回されたこと、農業は重点目標からはずされたこと、そのため、アイヌのロシアへの懐柔策が中心だったことを論じている。来航時のロシアが、農業可能な千島獲得策（領土獲得策）を持っていたとは言えず、ロシアの南下に付随する政策を、領土拡張策の面では過大に評価できないと批判している。

第3章「天明年間の日本北辺と北太平洋」では、「海獣の宝庫」の北太平洋におけるロシア、欧米諸国の毛皮狩猟のための北太平洋渡来、先住民に依存した狩猟の様相、および行（ホン）商人に独占された広東での毛皮交易の実情を検証し、北太平洋への欧米諸国の渡来の増加によって、また北太平洋各地の先住諸民族の強い抵抗が起こるなかで、ロシアの北方政策が変動し、人質をとってする冒険商人の毛皮交易強制から先住民族懐柔策と領土確定へと向かったことを指摘している。

次いで、幕府による千島探検について、従来、検討されていない普請役山口鉄五郎を含めて最上徳内などの探検を検証し、幕府探検隊がエトロフで出会ったロシア人の冒険的で孤立的な形の南下活動が当時のロシアの北方政策を体現したものであったことを指摘する。この意味で、幕府はロシアの南下政策の現状をその限界をも含めてかなり正確に認識したと位置づけている。最上徳内は、ロシア南下による日本の危機と、松前藩の政策にたいする批判を訴えたが、最上の上役の山口ら、交渉の中枢を運営した幕臣たちは、松前藩の立場を配慮しつつ慎重な対外政策を提唱していた。天明期の対外交渉でも、千島アイヌは不可欠の役割を果たし、そして、この時期には、他の北方先住民族と違ってロシアの毛皮狩猟に動員されることのなかった千島アイヌのなかでも、ハツバやハウシビのようなエトロフアイヌが、日本からもロシアからも距離をおいた独自の活動を示したことを指摘している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 井 上 勝 生

副 査 教 授 原 暉 之

副 査 教 授 河 内 祥 輔

学 位 論 文 題 名

日本の北辺と北太平洋の歴史的研究

－安永・天明年間を中心に－

論文は、江戸時代後期、1770年代後半から80年代にかけての、「最初の日露交渉」、そして、ロシア人・蝦夷地渡来の背景などを解明するものである。

従来、江戸時代後期の北方史研究は、1790年代の、最初の公式外交、日露交渉を重視してきた。しかし、それは、不成功に終わった交渉であった。それにたいして、これに先行する1770年代後半から80年代にかけての交渉は、江戸幕府に公認されなかった交渉であるが、ロシアの南下、松前藩の政策、アイヌ民族の活動など、歴史的背景をもって実現した交渉といえることができる。

この最初期の日露交渉については詳しい研究が、見られなかった。また、日本の研究は、アメリカ大陸北西部にもおよぶロシアの動向、そして、アイヌ民族の独自性のある活動などを、一貫したものとしては、視野に入れていなかった。こうした重要な部分を、視野に入れた、また、江戸期の古文書などを利用した、「北方地域史研究」を意図した研究である。

第1章では、安永年間の、道東における日露交渉を詳しく検討している。ロシア側が、柔軟な姿勢であったこと、また、松前藩も、藩と「交易」している南千島のエトロフアイヌとじかに交易することは認めないが、北千島アイヌを仲介してであれば、問題にしないとするなど、ロシアの交易を事実上認めるといふ柔軟な姿勢であったことなどを、日露双方の史料から実証している。そして、日露の間で通訳者などとして、固有の活動を展開していた千島アイヌの独自性、固有性も検証している。

第2章においては、18世紀後期に、ロシア人が、先住少数民族を強圧的に従属させながら、高価なラッコ毛皮などを求めて、カムチャツカ半島から北千島、アメリカ大陸へと活動範囲を広げた歴史、少数諸民族の毛皮狩猟と交易、キャフタと広東での毛皮交易の展開との関連、南千島アイヌのロシアに対する抗争などを研究している。ロシアの南下政策について、ロシア史料を検討して、従来の、「農業のための南千島領土獲得政策」とする説を批判して、千島アイヌを対象とした政策であったことを指摘している。

第3章では、ロシアなどが北太平洋に渡来する過程、先住民族に依存した、また先住民族の強い抵抗を招いた、毛皮狩猟と交易、中国での毛皮交易の様相、先住民族制圧から懐柔政策への転換を実証している。ついで、1780年代の幕府の千島探検、ロシア人との交渉を検討し、交渉を中心になって担当した幕府役人は、松前藩の立場を配慮しつつ、ロシアに対する慎重な外交を提唱していたことを実証している。交渉で不可欠な役割を果たした千島アイヌの、日露双方から距離をとった、独自の活動も、エトロフアイヌなどについて検証を加えている。

委員会は、論文の成果を、4点について、評価した。

第1は、江戸期の古文書、および欧米諸国の史料を博搜し、18世紀後期・北太平洋地域史を構成したことである。

第2は、ロシアや北方先住民族の視点からも叙述した点である。

第3は、ロシアの「領土拡張政策説」など、漠然とした位置づけを、ロシア側史料の実証によって評価を訂正した点である。

第4は、交渉局面をリアルに描いて、北方先住諸民族の総合研究への展望を示した点である。

学位請求者は、古文書も駆使して、地域史を、正確な日本語で論述している。18世紀後期の北方史研究として、新しい地域史の可能性を示し、また、自身の今後の、さらに総合的な研究課題としても提示している。

委員会では、本論文が、課程博士学位（文学）授与の資格を満たすという点について、全員の意見が一致した。